

令和2年産大豆の生産振興基本方針

I 基本方針

大豆については、食料自給率の向上に向けて、国では、国産原料による大豆製品の需要拡大や収量・品質の高位安定化等により、国産大豆の生産拡大を推進している。

こうした中で、本県では、水田農業の基幹作物として大豆の生産振興を図り、一定の評価を得てきているが、実需者からは、県産大豆の安定生産・供給拡大を求められている。

このため、令和2年産大豆の生産にあたっては、実需者ニーズに的確に対応した「売れる大豆づくり」を基本とし、技術対策の徹底や効率的生産体制の整備を一層進めるとともに、「とやまGAP」の実施や生産履歴記帳の推進のほか、「エンレイ」を「えんれいのそら」へ全面切换えすることにより、より高品質で安全・安心な県産大豆の生産拡大を図る。

【推進目標】「売れる大豆づくり」を基本に、高品質で安全・安心な県産大豆の生産拡大

- | | |
|-------------------------|--------------------------------|
| 1 効率的な生産体制の整備 | ⇒ 作付面積 4,900ha程度 |
| 2 実需者ニーズに対応した高品質大豆の安定生産 | ⇒ 10a当たり収量200kg以上
⇒ 大粒比率の向上 |
| 3 「安全・安心」な大豆生産 | ⇒ 「とやまGAP」の実施及び生産履歴記帳100% |

II 重点推進事項

1 計画的な品種作付

- ・主力の「エンレイ(品種名：えんれいのそら)」に加えて、収量・品質が安定している「シュウレイ」や、作期幅の拡大が図られる晩生品種「オオツル」の実需者ニーズを踏まえた計画的な作付
- ・令和2年産から「エンレイ」を「えんれいのそら」へ全面切换えすることに伴い、品種特性や栽培技術について、生産者・指導者への周知を徹底

2 生産の拡大と効率的な生産体制の整備

- ・経営所得安定対策等の国の助成制度を有効に活用した作付面積の拡大
- ・大麦あと水田等への積極的作付による輪作体系の推進
- ・適地における作付の団地化および担い手への土地利用集積の一層の推進
- ・地域の実情に応じた機械・施設の導入等による効率的生産体制のさらなる整備

3 実需者ニーズに対応した高品質大豆の安定生産

- ・①土壌の酸性矯正と堆肥や加里などの積極的な施用、②適正な基肥施用、③排水対策の徹底、④適正な播種、⑤雑草防除の徹底、⑥的確な中耕培土、⑦干ばつ回避のための畦間かん水、⑧適正な病害虫防除などの重点技術対策の徹底
- ・難防除雑草等のほ場での早期発見と開花・結実前の除去
- ・刈り遅れによる品質低下や収穫ロスを防止するため、機械・施設等の計画的な稼働による、子実水分22%以下での刈り取り開始など適期収穫と子実水分に応じた乾燥・調製作業の徹底

4 安全・安心な大豆生産

- ・富山県適正農業規範に基づく「とやまGAP」の実施および生産履歴記帳の推進
- ・農薬使用基準の遵守と周辺作物・住宅への飛散防止

III 推進対策

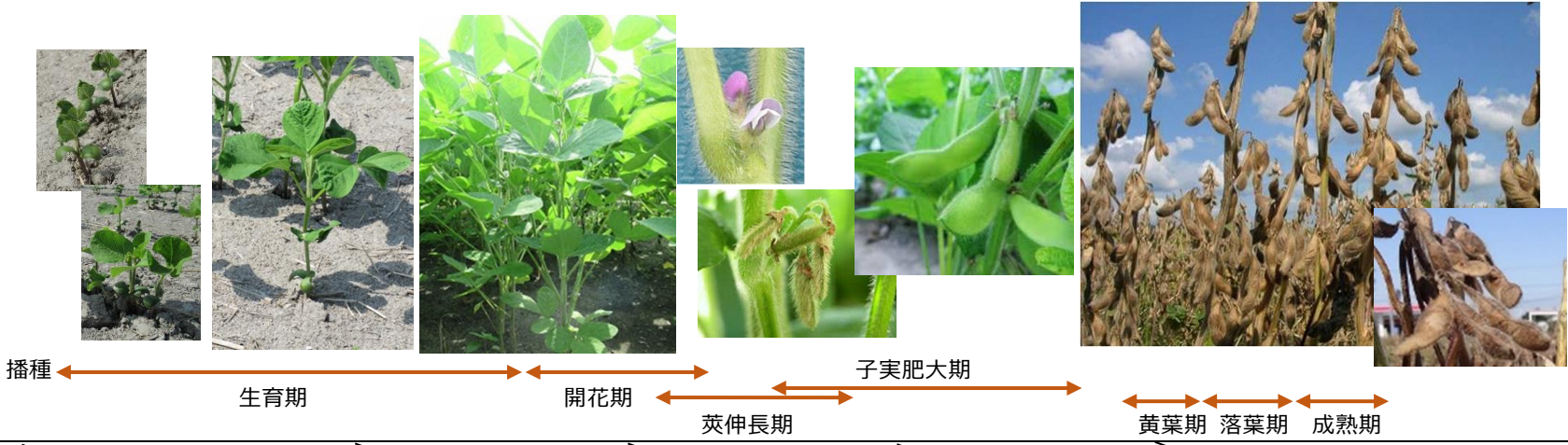
- 1 県米作改良対策本部において、気象や生育状況に応じた的確な技術対策を策定するとともに、地区農業技術者協議会等を中心に迅速かつ適切な指導の支援に努める。あわせて、富山県適正農業規範に基づく「とやまGAP」を推進する。
- 2 大豆産地協議会を中心として、消費動向や実需者ニーズを的確に把握し、品質向上対策に反映させるとともに、県産大豆のPRや生産履歴の情報開示を行う。また、地産地消の推進などを通じて県産大豆の需要拡大を図るとともに、実需者と結び付いた契約栽培を推進する。
- 3 高品質大豆の生産拡大や生産性向上を図るために、国の助成制度を積極的に活用する。

16 大豆栽培暦「えんれのそら」

大豆の生育

■栽培ポイント■

- ・土づくりの実践と適正な施肥
- ・排水対策の徹底
- ・適正な播種
- ・雑草防除
- ・的確な中耕培土
- ・干ばつ回避のための畦間かん水
- ・病害虫防除の徹底
- ・適正な収穫・乾燥



月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
作業名	①排水対策 ②種子塗抹処理 ③土づくり 石灰質資材の施用 地力増進作物や堆肥の施用	④耕起・基肥施用・播種 ⑤土壌処理除草剤の散布	⑥1回目培土（茎葉除草剤の散布） ⑥2回目培土 ⑦畦間かん水	⑧病害虫防除(8月2～3半旬) ⑧病害虫防除（8月4～5半旬）	⑨適期収穫 ⑩乾燥 調製・選別	

①排水対策

- ・前年秋～4月までの額縁および基幹排水溝の設置や心土破碎により、ほ場の乾きをよくする
- ・排水口は深く掘り下げる

②種子塗抹処理

- ・紫斑病やアザヒムシ等の病害虫防除のため、薬剤の種子塗抹処理を行う

③土づくり

- ・石灰質資材を施用し、土壌pH6.0～6.5確保、地力増進作物のすき込みや堆肥を施用する

	肥料名	施用量/10a
石灰質資材	苦土石灰	100～200kg
	牛ふん堆肥	1～2 t
堆肥（春施用）	豚ふん堆肥	0.5～1 t
	発酵けいふん	75～100kg
	籾殻堆肥	1～2 t

④耕起・基肥施用・播種

- ・耕起～播種の一連の作業はほ場が乾いた状態で実施（1日で行う）

基肥	肥料名(配合比)	土壌条件	施用量/10a
BB084	(10-18-24)	砂壤土	30～40kg
		埴壤土	20～30kg

品種	播種時期	栽植本数 ^{注)} (本/10a)	播種量(kg/10a)
えんれいのそら	5月6半旬～	14,000～	5.6～6.4 (大粒)
	6月上旬	16,000	4.2～4.7 (中粒)

注)・大粒の百粒重：35.8gとして計算した場合
・スリップ率は考慮していない

⑤土壌処理除草剤の散布

- ・播種後、早めに散布する
- ・規定量を均一に散布し、除草剤の効果向上と、薬害の発生防止に努める

⑥的確な中耕培土

- ・培土は根域の拡大、根粒の増加、雑草の抑制、排水の促進、土壌通気性の向上、倒伏防止の効果がある。
- ・2～3葉期と4～5葉期頃に2回培土を行う

茎葉除草剤の散布

- ・培土で抑制しきれない雑草や難防除雑草が生じた場合は雑草の発生状況に応じた茎葉処理除草剤の適期散布する

⑦畦間かん水

- ・開花期頃～9月上旬頃までは、3日以上晴天が続いたら、畦間かん水する
- ・ほ場全体に水が行き届いたら水口を止め速やかに排水する

⑧病害虫防除

- ・2回の基本防除を確実に実施するとともに、追加防除は、払い落とし調査等により防除要否・時期等を決定して随時防除する

⑨適期収穫

- ・収穫前に雑草や青立ち株を取り除き、汚損粒の発生を防止する。
- ・子実水分22%、褐色莢90%以上で刈り取りを開始する

⑩乾燥

- ・機械乾燥する場合は気温プラス5℃以内の送風温度とする
- ・共同乾燥調製施設を利用し、整粒歩合が高く、粒径の揃った均質な大豆に仕上げる